Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 国際結婚夫婦のコミュニケーションにおける言語能力の役割 |
| Author(s) | 施, 利平 |
| Citation | 年報人間科学. 1999, 20-2, p. 421-438 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/11484 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 国際結婚夫婦のコミュニケーションにおける言語能力の役割

施　利平

〈要旨〉
国籍及び文化背景が異なる者同士の婚姻を「国際結婚」と定義し、一方は日本人でもう一方は外国人である夫婦を調査対象とし、これらの国際結婚夫婦のコミュニケーションにおける言語能力の役割を、筆者が1997年に行った調査から得られたデータを用いて分析した。因子分析で国際結婚家庭の夫婦間コミュニケーションには、7つの因子が存在していたことがわかった。これらの因子は「夫のコミュニケーションの率直さ」、「妻のコミュニケーションの率直さ」、「コミュニケーションの摩擦」、「夫のコミュニケーションの情緒的効果」、「妻のコミュニケーションの量と質」、「夫の言語コミュニケーションへの認識」と「妻のコミュニケーションの情緒的効果」である。言語能力は夫のコミュニケーションの率直さ、妻のコミュニケーションの量と質、夫の言語コミュニケーションへの認識及び妻のコミュニケーションの情緒的効果に影響を与えている。

キーワード
国際結婚、コミュニケーション、言語能力、摩擦、理解と共感

## はじめに

一九八五年以降日本国籍の者と外国国籍の者との婚姻が急増している。その数は一九九六年には二八三七二件と過去最高の件数となり、一〇〇組のうちの三・六組が国際結婚ということになった（厚生省大臣官房統計調査部、一九九七）。更に今後も国際結婚が増加すると予測される。

本稿では「国際結婚」を、国籍及び文化的背景が異なる者同士の婚姻であると定義し、以下の二点を明らかにする。第一は国際結婚夫婦のコミュニケーションの構造を明らかにすることであり、第二は夫婦間のコミュニケーションは夫婦の言語能力に影響されるかを検証することである。

国際結婚夫婦にとっては、コミュニケーションは重要な事柄であると思われる。国籍を同じくする夫婦でも、夫婦間コミュニケーションは夫婦関係の改善・強化・結婚の満足度を規定する大きな要因として位置づけられ、その重要性が強調されている（木田、一九八七／近藤、一九九八）。まして、結婚するまで異なった文化背景で生まれ育ち、違った言葉、習慣及び異なった思考・行動様式を持っている男女が夫婦となり、家庭生活を営んで行くには、コミュニケーションの問題を抜きには結婚生活ができないと考えられる。

しかし、これまでの国際結婚についての研究では、コミュニケーションに焦点を当てたものは少ないが、国際結婚夫婦のコミュニケーションが困難であることが指摘されている（Rohrlich, 1988; Markoff, 1977.ボスバーグ、一九八九）。国際結婚夫婦のコミュニケーションを困難にしている要因を大きく分けると、二つある。言語能力の不足と価値システムや習慣などの異なった文化背景から生じる相手文化への理解不足である（鍋倉、一九九〇／ボスバーグ、一九八九／箕浦、一九八七）。

石川（一九九二）が指摘したように、文化も習慣も異なった国で生きてきた二人が一つの家庭を作り上げていく段階で，言葉は不可欠な要素である。夫婦間の言葉のやりとり、即ち言語コミュニケーションによって意志疎通と感情交流及び相違調整が果たされるため、言語能力が高ければ、言語能力の不足から生じる困難を減らすと考えられる。そして言語能力が直接コミュニケーション能力を高めるだけではなく，コミュニケーションに影響を及ぼす文化的及び社会的な要素への理解を高めることによって，国際結婚家庭の夫婦間コミュニケーションの二つ目の困難も減らせると考えられる。即ち、国際結婚家庭夫婦のコミュニケーションは言語能力によるところが大きいと予測できる。

そこで、本研究では国際結婚夫婦のコミュニケーションの量や質、様式などの諸側面を調べ、コミュニケーションのこれらの側面が言語能力に影響されているかどうかを明らかにしたい。本研究はこれまでの研究の欠如を補うと同時に、国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーションの向上に役たてばという目的で行ったものである。

## 1　研究の方法

### 1―1　調査の概要

研究の目的に合わせて、コミュニケーションの実態と構造、コミュニケーションに影響する社会的要因と夫婦の婚姻満足度という、三点を調べる質問紙調査を行った。

調査対象は、現在日本で結婚生活を送っている日本人と外国人との夫婦である。「国際結婚を考える会」[1]、大阪府国際交流センター及び大阪府のいくつかの日本語教室、ボランティアグループの協力を得、それぞれの会員（又は参加者）及びその配偶者に質問紙調査を依頼した。調査は一九九七年七月から質問紙を配布し、九月まで回収した。

調査方法は郵送法であり、返信用封筒を同封した。質問内容をよりよく理解してもらうために、日本語版、英語版及び中国語版の三種類の質問紙を用意し、それぞれの夫婦に一番得意な言語を選択し、回答してもらった。

なお、夫と妻の意識の違いやプライバシーを考慮し、同じ内容の質問紙に、別々に答えてもらい、別々に返信するよう、回答者夫婦に依頼した。夫と妻の質問紙が別々の封筒で返信され、更に夫と妻の質問紙が揃ったものを一ペアとして有効な標本と見なした。

質問紙の配布数は三八九ペアで回収率は二四％（九五ペア）であった。この回収数と回収率は①夫だけ又は妻だけの単独の標本、②外国人側配偶者は日本で生まれ、日本で教育を受けた在日外国人、③外国在住の者を除いたものである。

### 1―2　データの特性

有効回答九五ペアの夫婦の内、夫と妻の国籍が日本も入れて三一ケ国にわたり、国籍の分布は広範囲にわたっている。九五ペアの夫婦の国籍関係のタイプ[2]は、妻日本人・夫欧米人の夫婦が三八ペアで最も多く、妻日本人・夫アジア・アフリカ・南米人の夫婦が二五ペア存在する。夫日本人・妻アジア・アフリカ・南米人の夫婦が二七ペア、夫日本人・妻欧米人夫婦がもっとも少なく五ペアのみである[3]。年齢に関しては夫が三〇歳代と四〇歳代に集中し、妻が二〇歳代から四〇歳代に集中している。夫の年齢はレンジ二三―七六、$\bar{X}$=40.7、SD=10.9で、妻の年齢はレンジ二四―七七、$\bar{X}$=36.5、SD=9.8である。夫の学歴は、中学・高校卒一五・八％、短大卒・大学中退一一・六％、大学卒三三・七％、大学院三五・八％で、妻の学歴は中学・高校卒二一・〇％、短大卒・大学中退二六・三％、大学卒四〇・〇％、大学院一二・六％と、夫婦とも全般的に学歴が高い。夫の職業は、常用被雇用者四六・四％、自営業・自由業四九・四％、無職四・二％であり、妻の職業は、常用被雇用者一一・六％、自営業・自由業四二・一％、専業主婦四六・三％であった。結婚期間は五年未満が四二・一％で最も多く、五年以上一〇年未満の夫婦は二五・三％であり、両者の数を合わせると、九五組の中の半数以上を占める。（結婚期間がレンジ一―五一、$\bar{X}$=9.3、SD=10.2であ

る)。

### 1―3　分析方法

コミュニケーションの構造を明らかにするために、因子分析を用いて、コミュニケーションの構造がどんな側面によって構成されるかを明らかにし、国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーションの特徴及び夫と妻のコミュニケーションの異同を究明した。次に、夫婦の言語能力が夫婦間コミュニケーションに影響を与えているか、もし与えているのならば夫婦間コミュニケーションは言語能力によってどのように異なるかを検証するために、従属変数として夫婦間コミュニケーションの構造で抽出した七因子を用い、これらと独立変数である夫と妻の言語能力（二変数）との組み合わせ合計一四パターンに関して一元配置の分散分析を行った。

## 2　夫婦間コミュニケーションの構造

### 2―1　分析に使われる質問項目の内容と尺度

夫婦間コミュニケーション構造の分析に使われる質問項目の内容と尺度をまとめたものは表一である。

### 2―2　因子パターンと解釈

次に、以上の質問項目を用いて、夫婦間コミュニケーションの構造を明らかにした。分析に用いたのは統計パッケージ（SPSS V6.0.1）である。

コミュニケーションに関する以上の一四の質問項目を用い、なお、夫と妻の意識の違いやコミュニケーションのあり方の違いがあるのではないかと予想し、さらに夫婦の婚姻満足度は夫婦相互のコミュニケーションによって規定されるという前提に立ち、夫婦ペアの分析が適切であると判断した。主因子法による因子分析を行い、固有値一以上の因子七個を選択した。因子数を六ないし八に指定して分析も行ったが、七因子の時の因子解釈は最も良いものであったため、以下本研究では七因子を採用した。この七因子の累積寄与率は六九・七％で、説明力はかなり大きい。次に因子解を解釈しやすいものとするために、斜交回転を行った。その因子パターンが表二である。

以下にそれぞれの因子の解釈を行う。

第一因子は「明確・夫」[4]、「ありのまま・夫」、「発言・夫」が高い因子負荷量を示す。夫が日頃よく発言し、ありのままに自分の気持ちを表現し、明確に自分の考えを妻に伝えるか否かという内容であり、夫のコミュニケーションの率直さに関する因子と言える。従って第一因子を「**夫のコミュニケーションの率直さ**」と名づける。この第一因子によって全分散の二九・二％が説明できるので、国際結婚家庭での夫婦間コミュニケーションはこの因子によって大きく説明されることが分かる。

第二因子は「明確・妻」、「発言・妻」、「ありのまま・妻」、「伝える意志・妻」が高い因子負荷量を示す。第一因子は夫の率直さを示

# 表1 質問項目の内容と尺度の一覧表

| 質問文 | 略語 | 尺度 |
|---|---|---|
| 1 あなた達ご夫婦は日常的に夫婦の会話はどのぐらい行われていますか | 会話の程度 | 「2人でよく話す」を3、「どちらか一方は話したいがもう一方は必要最小限のことしか話さない」を2、「2人ともお互いに必要最小限のことしか話さない」を1 |
| 2 現在の会話の量は十分だと思いますか | 会話の量 | 「十分」を4、「ほぼ十分」を3、「やや不足」を2、「不足」を1。 |
| 3 あなた達ご夫婦の間にただの世間話や雑談をすることはどのぐらいありますか | 雑談 | 「よくある」を4、「時々ある」を3、「あまりない」を2、「ない」を1。 |
| 4 あなたは御主人（又は奥さん）と会話をするとき、話が弾んだり、一緒に笑ったり、じっくり話し合ったりするようなことがありますか | 会話の質 | 同上 |
| 5 夫婦の間で会話をするとき、言葉で明確に自分の考えや意志を伝えるべきだと思いますか | 伝える意志 | 「そう思う」を4、「どちらかと言えばそう思う」を3、「どちらかと言えばそう思わない」を2、「全くそう思わない」を1。 |
| 6 あなたは普段思ったことを発言しますか | 発言 | 「よく発言する」を4、「時々発言する」を3、「あまり発言しない」を2、「発言しない」を1。 |
| 7 あなたは自分の気持ちをありのままに伝えますか | ありのまま | 「伝える」を4、「大体伝える」を3、「あまり伝えない」を2、「伝えない」を1。 |
| 8 あなたは自分の考えや意見を明確に伝えますか | 明確 | 同上 |
| 9 あなたの御主人（又は奥さん）があなたの話に十分耳を傾けていると思いますか | 傾聴 | 「そう思う」を4、「大体そう思う」を3、「あまりそう思わない」を2、「そう思わない」を1。 |
| 10 あなたの御主人（又は奥さん）があなたの言っていることの意味を理解していると思いますか | 意味理解 | 同上 |
| 11 あなたの御主人（又は奥さん）があなたの発言に込められた気持ちや感情を理解していると思いますか | 感情理解 | 同上 |
| 12 あなたは御主人（又は奥さん）と喜びや悩みを分かち合っていますか | 共感 | 「分かち合っている」を4、「大体分かち合っている」を3、「あまり分かち合っていない」を2、「分かち合っていない」を1。 |
| 13 あなたは御主人（又は奥さん）と文化や習慣などの文化的違いのための口喧嘩の頻度は次のどちらですか | 口喧嘩の頻度 | 「ない」を4、「あまりない」を3、「時々ある」を2、「よくある」を1。 |
| 14 口喧嘩しなくても文化的な違いのため傷つくと感じる頻度は、次のどちらですか | 傷つく頻度 | 同上 |

## 表2　コミュニケーション構造の因子パターン

| | 夫の率直さ | 妻の率直さ | 摩擦 | 夫の効果 | 妻の量と質 | 夫の認識 | 妻の効果 | 共通性 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 「明確・夫」 | **.822** | .002 | -.065 | -.098 | -.052 | -.203 | -.002 | .695 |
| 「ありのまま・夫」 | **.772** | -.093 | .050 | -.007 | -.196 | -.005 | -.014 | .735 |
| 「発言・夫」 | **.633** | .078 | -.128 | -.164 | .146 | .367 | -.063 | .746 |
| 「雑談・夫」 | .340 | -.140 | .129 | -.137 | -.056 | .315 | -.024 | .442 |
| 「会話の量・夫」 | .313 | .121 | .302 | -.262 | -.013 | .257 | .244 | .562 |
| 「明確・妻」 | .080 | **.715** | -.049 | -.018 | -.070 | .009 | -.113 | .603 |
| 「発言・妻」 | -.007 | **.674** | .088 | .030 | -.164 | -.017 | .230 | .516 |
| 「ありのまま・妻」 | .083 | **.662** | -.148 | -.020 | -.091 | -.102 | -.309 | .653 |
| 「伝える意志・妻」 | -.155 | **.656** | -.096 | -.099 | .119 | .215 | -.101 | .523 |
| 「口喧嘩頻度・妻」 | .057 | -.084 | **.796** | .123 | .047 | .049 | -.210 | .710 |
| 「傷つく頻度・妻」 | -.108 | .253 | **.663** | -.141 | -.050 | -.115 | -.045 | .586 |
| 「傷つく頻度・夫」 | .037 | -.111 | **.547** | -.059 | .020 | -.003 | .087 | .336 |
| 「口喧嘩頻度・夫」 | -.068 | -.251 | **.526** | -.151 | .078 | -.047 | -.183 | .487 |
| 「感情理解・夫」 | .180 | .059 | .025 | **-.917** | .133 | -.105 | -.047 | .955 |
| 「意味理解・夫」 | .063 | .010 | -.041 | **-.843** | .006 | -.042 | -.114 | .779 |
| 「共感・夫」 | -.084 | -.039 | .137 | **-.683** | -.328 | .0002 | .213 | .676 |
| 「傾聴・夫」 | .248 | -.023 | .178 | **-.477** | .009 | .111 | -.073 | .571 |
| 「会話の質・夫」 | .189 | -.356 | -.046 | **-.438** | -.182 | .397 | -.095 | .774 |
| 「雑談・妻」 | .009 | -.071 | -.191 | -.149 | **-.720** | -.027 | -.114 | .576 |
| 「会話の程度・妻」 | .069 | .140 | .056 | .145 | **-.656** | .095 | .039 | .533 |
| 「会話の量・妻」 | .231 | .149 | .098 | -.036 | **-.480** | .103 | -.009 | .514 |
| 「会話の質・妻」 | .139 | .173 | .015 | -.080 | **-.425** | .193 | -.109 | .495 |
| 「伝える意志・夫」 | -.098 | .059 | -.074 | .101 | -.091 | **.649** | -.008 | .434 |
| 「会話の程度・夫」 | .363 | .073 | .087 | .049 | -.037 | .397 | .049 | .450 |
| 「感情理解・妻」 | .144 | .201 | .340 | .071 | -.213 | -.015 | **-.558** | .744 |
| 「共感・妻」 | .006 | .179 | .254 | -.195 | -.046 | .047 | **-.488** | .569 |
| 「意味理解・妻」 | -.007 | .125 | .355 | -.023 | -.225 | -.0001 | **-.459** | .596 |
| 「傾聴・妻」 | -.110 | -.095 | .151 | -.231 | -.326 | .158 | -.365 | .517 |
| 固有値 | 8.172 | 3.401 | 2.839 | 1.553 | 1.283 | 1.170 | 1.090 | |
| 寄与率 | .292 | .121 | .101 | .055 | .046 | .042 | .039 | |

注：「夫の率直さ」は「夫のコミュニケーションの率直さ」の略語、「妻の率直さ」は「妻のコミュニケーションの率直さ」の略語、「摩擦」は「コミュニケーションの摩擦」の略語、「夫の効果」は「夫のコミュニケーションの情緒的効果」の略語、「妻の量と質」は「妻のコミュニケーションの量と質」の略語、「夫の認識」は「夫の言語コミュニケーションへの認識」の略語、「妻の効果」は「妻のコミュニケーションの情緒的効果」の略語である。以下も同じである。

す因子であったが、この第二因子は妻に関してのほぼ同一の項目が入っており、「**妻のコミュニケーションの率直さ**」を示す因子と言える。

第三因子は「口喧嘩頻度・妻」、「傷つく頻度・妻」、「傷つく頻度・夫」と「口喧嘩頻度・夫」が高い因子負荷量を示す。この因子は夫と妻が文化的な違いで口喧嘩になる頻度と傷つく頻度を表すものであり、「**コミュニケーションの摩擦**」を示す因子である。

第四因子は「感情理解・夫」、「意味理解・夫」、「共感・夫」、「傾聴・夫」と「会話の質・夫」が高い因子負荷量を示す。夫のコミュニケーションに含まれた意味と感情が妻に理解されているか、夫が妻との共感度が高いかどうか、妻がよく話を聞いてくれるかどうかという内容であり、「**夫のコミュニケーションの情緒的効果**」を示す因子といえる。これに対応する妻側のものは第七因子として独立して出現した。第七因子は「感情理解・妻」、「共感・妻」と「意味理解・妻」が高い因子負荷量を示す。従って第七因子を「**妻のコミュニケーションの情緒的効果**」とする。

第五因子は「雑談・妻」、「会話の程度・妻」、「会話の量・妻」と「会話の質・妻」が高い因子負荷量を示す。妻が夫と雑談する程度、夫との会話の量と程度及び夫との会話の質を表すものである。従ってこの第五因子は「**妻のコミュニケーションの量と質**」を示す因子といえる。この因子は妻側だけの因子であり、夫側に対応するものが独立して存在していない。

一方、第六因子には、「伝える意志・夫」が高い因子負荷量を示す。夫の言語コミュニケーションに対する認識を表す因子で「**夫の言語コミュニケーションへの認識**」とする。この因子は夫側だけの因子である。

以上の七因子を次の三つのレベルに分けられよう。まず夫婦に共通する因子として「コミュニケーションの摩擦」が存在している。

そして、コミュニケーションの率直さ次元には「夫のコミュニケーションの率直さ」因子、「妻のコミュニケーションの率直さ」因子が独立した因子として存在し、コミュニケーションの情緒的効果にも「夫のコミュニケーションの情緒的効果」因子と「妻のコミュニケーションの情緒的効果」因子が独立して存在している。

最後に、夫と妻に異なった因子もそれぞれ存在している。妻には「妻のコミュニケーションの量と質」因子、夫には「夫の言語コミュニケーションへの認識」因子が存在している。

以上のように、夫と妻のコミュニケーション構造に異なったコミュニケーション因子が存在している。ということは、夫と妻の間にコミュニケーションのあり方と意識の違いが存在していることが示されていると考えられる。

### 2-3 コミュニケーション諸因子の尺度得点と特徴

夫婦間コミュニケーションの特徴及び夫と妻のコミュニケーションの異同を検証するために、まず、以上のコミュニケーション構造に関する因子分析の結果に基づき、コミュニケーションの率直さ、コミュニケーションの情緒的効果、コミュニケーションの摩擦、妻

のコミュニケーションの量と質、夫の言語コミュニケーションへの認識という五つの次元でコミュニケーション諸因子の尺度得点を作成した。

コミュニケーションの率直さ次元に関しては、夫と妻の回答別で「発言」、「明確」と「ありのまま」の三項目の合計得点の平均値をそれぞれのコミュニケーション率直さの得点とした。「夫のコミュニケーションの率直さ」因子の平均値は三・四八で、標準偏差は〇・五五であった。一方、「妻のコミュニケーションの率直さ」因子の平均値は三・五三で、標準偏差は〇・四八であった。夫と妻のコミュニケーションの率直さは両者とも高く、両者のうち、夫より妻のほうがコミュニケーションの率直さは高く、率直さのばらつきも夫より小さい。

コミュニケーションの情緒的効果に関しては、夫と妻の回答別で「感情理解」、「意味理解」と「共感」の三項目の合計得点の平均値をそれぞれのコミュニケーションの情緒的効果の得点とした。「夫のコミュニケーションの情緒的効果」因子の平均値は三・四七で、標準偏差は〇・五三である。一方「妻のコミュニケーションの情緒的効果」因子の平均値は三・三三で、標準偏差〇・六一である。夫と妻の情緒的効果の違いを検定したところ、その差が有意であることが証明された。ペアとなっている夫と妻のコミュニケーションの情緒的効果については、夫の方が高いことが示された（T＝2.16、DF＝92、P<0.05）。

「コミュニケーション摩擦」因子に関しては、「口喧嘩頻度」、「傷つく頻度」の二項目に関する夫と妻の回答の合計得点の平均値を「コミュニケーション摩擦」因子の得点とした。この因子の平均値は二・六五で、標準偏差〇・六〇である。この結果は文化的な違いからくる摩擦が「あまりない」と「時々ある」との間に回答が集中していることを表している。

「妻のコミュニケーションの量と質」因子は、「雑談」、「会話の程度」、「会話の量」と「会話の質」の四項目の妻の回答の合計得点の平均値を尺度得点とした。この因子の平均値は三・二七で、標準偏差は〇・四八である。

「夫の言語コミュニケーションへの認識」因子は「伝える意志」という項目に関する夫の回答を尺度得点とした。この因子の平均値は三・五一であり、標準偏差は〇・七五である。夫の言語コミュニケーションへの認識は高いとはいえ、ばらつきが大きいということは夫の間に言語コミュニケーションへの認識の差が存在することが示されている。

### 2－4　諸因子間の相関関係

以上の七因子間の相関関係は表三の通りである。この相関関係は七因子の尺度得点を用いて調べたものである。

コミュニケーションの率直さ次元、コミュニケーションの量と質次元とコミュニケーションの情緒的効果の三次元の間に多くの有意な相関が見られた。

コミュニケーションの摩擦次元はコミュニケーションの情緒的効

**表3　コミュニケーション諸因子間の相関関係**

| | 夫の率直さ | 妻の率直さ | 摩擦 | 夫の効果 | 妻の効果 | 妻の量と質 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 妻の率直さ | .137 | | | | | |
| 摩擦 | .134 | -.065 | | | | |
| 夫の効果 | .487*** | .099 | .354*** | | | |
| 妻の効果 | .196 | .218* | .437*** | .375*** | | |
| 妻の量と質 | .428*** | .370*** | .145 | .387*** | .546*** | |
| 夫の認識 | .108 | .061 | -.086 | -.006 | .140 | .262* |

注：*は危険率は0.05未満
　　**は危険率は0.01未満
　　***は危険率は0.001未満

果次元との間に有意な相関が存在し、言語コミュニケーションへの認識次元はコミュニケーションの量と質次元との間に有意な相関が存在していた。

「夫のコミュニケーションの率直さ」因子は「夫のコミュニケーションの情緒的効果」因子との間に、「妻のコミュニケーションの率直さ」因子は「妻のコミュニケーションの情緒的効果」因子との間に正の有意な相関が存在していた。そして、夫と妻のコミュニケーションの率直さは、「妻のコミュニケーションの量と質」との間にも、有意な相関が存在していた。即ちコミュニケーションを率直に行っている人は、相手との間に相互理解と共感が高く、コミュニケーションの情緒的効果が高くなっている。そしてコミュニケーションを率直に行っている家庭では、妻のコミュニケーションの量と質が高くなっている。

「コミュニケーションの摩擦」因子は夫と妻のコミュニケーションの情緒的効果因子との間に有意な相関が見られ、コミュニケーション摩擦の少ない家庭では夫も妻もコミュニケーションの情緒的効果が高くなっている。

そして「夫のコミュニケーションの情緒的効果」因子と有意な相関が見られたのは、「夫のコミュニケーションの率直さ」因子、「コミュニケーションの摩擦」因子以外、「妻のコミュニケーションの量と質」因子と「妻のコミュニケーションの情緒的効果」因子である。妻のコミュニケーションの量と質の高いところでは夫のコミュニケーションの情緒的効果が高くなっており、また妻のコミュニケーシ

ョンの情緒的効果が高いと、夫のコミュニケーションの情緒的効果が高くなっている。「妻のコミュニケーションの量と質」因子はまた「妻のコミュニケーションの情緒的効果」との間に有意な相関が存在している。

「妻のコミュニケーションの量と質」因子はまた「夫の言語コミュニケーションへの認識」因子との間にも有意な相関関係が見られた。夫の言語コミュニケーションへの認識の高いところでは妻のコミュニケーションの量と質が高くなると示されている。

## 2-5 考察

ここまで国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーションの構造を、因子分析で明らかにした。

国際結婚家庭では言葉も文化背景も異なり、相手の行動パターンに対して自文化の枠組みでは判断や理解できないところが多いので、国際結婚家庭の夫婦は言語コミュニケーションを主なコミュニケーションの手段として使い、言語コミュニケーションに多く依存している[5]。言語コミュニケーションによって日頃よく発言し、自分の気持ちや考えを率直かつ明確に相手に伝えることも、言葉で相手の考えや気持ちを確認することも重要であると考えられる。そのため、夫と妻のコミュニケーションの率直さ因子が独立した因子として存在し、これらの二因子が大きな説明率を持っていたのではないかと思われる。国際結婚家庭の夫婦間コミュニケーションの様式は夫も妻も率直であることは以上のような国際結婚家庭の特徴を表しているといえよう。

それに関連して、実際の生活の中、意思の伝達や感情の交流は言語コミュニケーションに頼ることが多い分だけ、言語コミュニケーションへの認識も高くなる。そのため、本研究で示されたように、言語コミュニケーションへの認識、コミュニケーションの量と質が独立した次元として存在していたと思われる。

コミュニケーションの摩擦については、ここでは夫と妻の間に不一致は大きくなく、同一の因子として抽出された。国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーションの構造の中において、コミュニケーション摩擦という次元が存在することは、ボスバーグ（一九八九）、シタラム（一九八五）、佐藤（一九八九）、新田（一九九二）が指摘しているように国際結婚夫婦には文化による摩擦が伴うことが多いからと言えよう。夫婦間のコミュニケーションにも文化の違いから生じる摩擦が避けられないのは国際結婚家庭の夫婦間コミュニケーションの特徴の一つで、夫婦の両者に共通して生じる特徴と言えよう。

更に、コミュニケーションの情緒的効果、すなわちコミュニケーションで伝達される意味と感情の理解、及び夫婦間の共感はコミュニケーションによって始めて果たされるものであり、コミュニケーションの成否を見極める重要な尺度の一つである以上、コミュニケーションの構造を明らかにする時、欠くことができないものである。本研究では夫も妻もコミュニケーションの情緒的効果が高く、夫婦間コミュニケーションによって、夫婦間相互理解と共感を高く得ら

れていることを表していると見受けられる。

以上のことを視野に入れて、国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーションの構造を考えると、コミュニケーションの構造がコミュニケーションの率直さ、コミュニケーションの摩擦、コミュニケーションの情緒的効果、コミュニケーションの量と質、言語コミュニケーションへの認識、コミュニケーションの摩擦という五つの次元から構成されていると考えることが出来よう。

これに従って、本研究で明らかになった国際結婚家庭の夫婦間コミュニケーションの特徴と夫と妻のコミュニケーション構造の異同についてまとめると、二点がある。第一は全般的には、今回調査した国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーションはコミュニケーションの率直さ、コミュニケーションの情緒的効果、コミュニケーションの量と質及び言語コミュニケーションへの認識は高く、コミュニケーションの摩擦が少ないことである。第二は夫と妻のコミュニケーションの構造が異なっているということである。夫と妻に共通している因子は「コミュニケーションの摩擦」であった。因子分析によるとコミュニケーションの率直さという次元は、「夫のコミュニケーションの率直さ」因子は夫の回答のみで構成されている因子であり、「妻のコミュニケーションの率直さ」因子は妻の回答のみで構成されている因子であり、両者が独立した因子として抽出された。コミュニケーションの情緒的効果次元にも同じ特徴が見られた。このことは、夫と妻ではこれらの次元については回答の違いがあるということを示している。相違点については、夫のコミュニケーションの構造をなすものは、以上の因子以外に「夫の言語コミュニケーションへの認識」という因子が独立して存在したが、一方妻の方には「妻のコミュニケーションの量と質」という因子が存在していた。即ち夫と妻のコミュニケーション構造には共通する側面と異なる側面が存在し、それぞれ独自な特徴を持っていると言えよう。

## 3　言語能力が夫婦間コミュニケーションに与える影響

### 3－1　分析方法

夫婦の言語能力が夫婦間コミュニケーションに与える影響を検証するために、従属変数として「2　夫婦間コミュニケーションの構造」で抽出した七因子を用い、これらと独立変数である夫と妻の言語能力（二変数）との組み合わせ合計一四パターンに関して一元配置の分散分析を行った。夫婦の言語能力を測定するには、「現在あなた達ご夫婦の間で最も良く使われる言葉であなた自身をどのぐらい表現できますか」という質問を用い、「表現できない」を一、「大体表現できる」を二、「良く表現できる」を三と得点化した。以下「表現できない」、「大体表現できる」と「良く表現できる」を言語能力の低、中、高という三つのレベルと見なす。

### 3－2　仮説

まず、言語能力が夫婦間コミュニケーションに与える影響についての仮説を以下の①から⑥に記す。

①「言語能力が高ければ自分の気持ちや考えを言葉で自由に表現できき、コミュニケーションの率直さが高くなる」と考えられる。

②また、言語能力が高くないから、言語に頼れない分、もっと率直にコミュニケーションを行う必要性が高まり、夫婦間コミュニケーションの率直さが高まるとも考えられる。

③言語能力が高いから、相手に自分の気持ちや考えを自由に表現し、相手の話もよく理解できることから、「言語能力が高ければ、夫婦間の相互理解と共感を達成しやすくなり、コミュニケーションの情緒的効果が高くなる」と仮定できる。

④以上の理由から「言語能力が高ければ、コミュニケーションの摩擦が減少する」とも考えられる。

⑤言語能力が高いところでは、夫婦間のコミュニケーションの量と質が高いと考えられる。

⑥言語能力が高ければ、夫婦間のコミュニケーションに対して言語による不自由さを感じず、言語コミュニケーションの重要さをを改めて認識することが少ないから、「言語能力の高いところでは、言語コミュニケーションへの認識が低い」と仮定できる。

### 3－3　分析と結果

夫と妻の言語能力は、レンジ一－三、夫の場合、$\bar{X}$=2.57、SD=0.58、妻の場合、$\bar{X}$=2.52、SD=0.54と全般的に高い。

夫婦の言語能力と夫婦間コミュニケーションとの関連を分析した。それぞれの一元配置の分析結果を表四の「言語能力と夫婦間コミュニケーションとの関連」に示す。

**表４　言語能力と夫婦間コミュニケーションとの関連**

n = ( )

| | 夫の言語能力 | 妻の言語能力 |
|---|---|---|
| 夫の率直さ | | 言語能力低　3.67(2 )<br>言語能力中　3.33(41)<br>言語能力高　3.62(51)　*F=3.91* |
| 妻の率直さ | | |
| 夫の効果 | | |
| 妻の効果 | 言語能力低　2.67(4)<br>言語能力中　3.21(32)<br>言語能力高　3.45(59)　*F=4.44* | 言語能力低　3.00(2)<br>言語能力中　3.17(41)<br>言語能力高　3.49(51)　*F=3.70* |
| 摩擦 | | |
| 妻の量と質 | 言語能力低　2.69(4)<br>言語能力中　3.16(30)<br>言語能力高　3.37(56)　*F=5.29** | |
| 夫の認識 | 言語能力低　2.00(4)<br>言語能力中　3.44(32)<br>言語能力高　3.65(57)　*F=11.44*** | |

注 1)　コミュニケーションの７因子の尺度得点は最も高いものは４、まあまあ高いものは３、あまり高くないものは２、高くないものは１。

2)　*p<0.05、　**p<0.01 、***p<0.001

「夫のコミュニケーションの率直さ」因子は妻の言語能力によって異なっていた。妻の言語能力の低いところと高いところでは、「夫のコミュニケーションの率直さ」が高い。一方、「妻のコミュニケーションの量と質」因子は夫の言語能力によって、異なっていた。夫の言語能力の高いところでは「妻のコミュニケーションの量と質」が高い。

そして、「夫の言語コミュニケーションへの認識」は夫の言語能力によって、異なっていた。言語能力の高い夫は言語コミュニケーションへの認識も高いが、言語能力の低いところでは夫の言語コミュニケーションへの認識が低い。

また、「妻のコミュニケーションの情緒的効果」が妻と夫の言語能力によって異なっていた。夫と妻自身の言語能力の高いところでは「妻のコミュニケーションの情緒的効果」が高い。

「妻のコミュニケーションの率直さ」因子、「夫のコミュニケーションの情緒的効果」因子と「コミュニケーションの摩擦」因子は夫婦の言語能力に影響されていなかった。

### 3－4　仮説の検証

「言語能力が高ければ自分の気持ちや考えを言葉で自由に表現でき、コミュニケーションの率直さが高くなる」という仮説①と「言語能力が高くないから、コミュニケーションの率直さが高い」という仮説②は部分的に支持された。妻の表現力が低いと夫の率直さが高くなり、また妻の言語能力の高いところでも夫の率直さが高い。

「言語能力が高いと、コミュニケーションの情緒的効果が高くなる」という仮説③も部分的に支持された。妻のコミュニケーションの情緒的効果が夫と妻の言語能力に影響されるが、夫の効果が言語能力に影響されなかった。

「言語能力が高ければ、コミュニケーションの摩擦が減少する」という仮説④が支持されなかった。

「言語能力が高いところでは、夫婦間のコミュニケーションの量と質が高い」という仮説⑤が妻の場合に当てはまる。妻のコミュニケーションの量と質は夫の言語能力に影響される。

「言語能力の高いところでは、言語コミュニケーションへの認識が低い」という仮説⑥が支持されなかった。仮説と反対に、夫の言語能力の高いところでは夫の言語コミュニケーションへの認識が高いという結果を得られた。

### 3－5　考察

言葉が意志疎通を図る道具であり、また自分という人間を表現する媒体でもある。言葉は態度の中の大切な一要素となって、人間を表す。だから言葉をうまく制御できないと、会話の内容が幼稚になるだけでなく、その人間の真の姿がそのとおりに伝わらない危険が生じると川口（一九九七）によって言葉の重要さが強調されている。ところが、鍋倉（一九九〇）の言うように異文化に属する人間同士が互いにコミュニケートする場合、まず、「言葉の壁」が存在する。特に、両者が共通の言葉を持たない場合、「言葉の壁」は、明白な事

実となる。国際結婚夫婦にとっては言葉が国際結婚家庭の最大の障害の一つであると、国際結婚夫婦をインタビューした日暮（一九八九）が報告している。

国際結婚家庭の夫婦間コミュニケーションが夫婦間の使用言語の言語能力に多く影響されていたことが本研究で実証された。まず、夫のコミュニケーションの率直さと妻のコミュニケーションの量と質が相手の言語能力によって異なっていた。夫は妻の言語能力が低い場合と高い場合、率直にコミュニケーションを行っている。ということは、言語能力の低い妻に対して自分を表現するとき、言葉の機能が妻の言語能力に制限されるため、夫が率直に自分を表現することによって、より良く理解されたいという気持ちが働いていると思われ、また妻が言語能力が高い場合、夫が思うままに自分を率直に表現し、自分の気持ちや考えを伝えることが可能であるために、コミュニケーションの様式が率直であると考えられる。一方、妻のコミュニケーションの率直さは妻自身の言語能力にも夫の言語能力にも影響されない理由としては、妻が言語能力を気にせず、率直に自分を表現することが多く、また非言語コミュニケーションによっても、自分を率直に表現しているので、言語能力にそれほど制限されないのではないかと考えられる。

そして、妻のコミュニケーションの量と質は夫の言語能力によって異なり、夫の言語能力の高いところでは妻のコミュニケーションの量と質が高くなっていることは、妻にとっては相手が言語能力が低く、自分の話が良く理解できないとき、会話の量が減少し、夫との会話の質、即ち夫婦が会話をするとき話が弾んだり、一緒に笑ったり、じっくり話し合ったりするようなことが少なくなるので、会話の質も低下すると考えられる。

更に、妻のコミュニケーションの情緒的効果は自分と夫の言語能力の高いところでは高いことは、自分が夫に良く理解され、夫との間に高い共感を持つと感じている。一方、夫のコミュニケーションの情緒的効果は夫と妻の言語能力に影響されていないことは夫にとっては、自分が理解されているか、妻との間に共感を持っているかどうかは言語能力に影響されない側面を持っていることを示唆しているのではなかろう。ジェンダー視点から考えれば、女性のほうが小さいときから情緒的に人を理解し、人の気持ちを受容することが期待され、訓練されるので、夫が言語能力が低くて表現が良くできなくても、又は自分の言語能力が低く相手を完全に聞き取れなくても、相手を理解すること、相手と共感を持つことに大きな障害を、夫と比べそれほど大きく感じなかったのであろう。従って、夫のコミュニケーションの情緒的効果、即ち妻に理解され、妻と共感を持つことは夫婦の言語能力にあまり影響されないが、一方、妻のコミュニケーションの情緒的効果は、つまり夫に理解され、夫と共感を持つには、夫側の言語能力はもちろん、妻側の表現力も要求され、高い言語能力を必要とされる。

夫の言語コミュニケーションへの認識は夫の言語能力の高いところでは高くなっていることは、言語能力の低い夫は夫婦間の摩擦やストレスを自分の言語能力の不足からくるものであると解釈しがち

なので、かえって言語コミュニケーションの重要さを見落としてしまうおそれがある。物事がうまく行かなくなったら、すべての理由を自分の言語能力の不足にする可能性が高いので、言語コミュニケーションへの認識が高められることが少ないと考えられる。そして、言葉で自分の考えていること、言いたいことを十分に表せないので行動でそれを表そうとする。以上の理由から言語能力の低い夫は言語コミュニケーションへの認識が低いと考えられる。

コミュニケーションの摩擦は言語能力に影響されないことは、コミュニケーションの摩擦は言語能力より、むしろ文化的な要素に大きく影響されているのではないかと予想される。国際結婚夫婦には文化による摩擦が伴うことが多いと、ボスバーグ（一九八九）、シタラム（一九八五）、佐藤（一九八九）、新田（一九九二）などの多くの研究でもしばしば指摘されている。

## 4　まとめ

本稿では国際結婚夫婦のコミュニケーションの構造を因子分析によって分析し、夫と妻のコミュニケーションの構造の異同を明らかにし、国際結婚家庭の夫婦の夫婦間コミュニケーションの全体像を読みとることができた。本研究での国際結婚夫婦のコミュニケーション実態としては、コミュニケーションが率直であること、コミュニケーションの情緒的効果が得られていること、コミュニケーションの量と質及び言語コミュニケーションへの認識が高く、文化的な違いから生じるコミュニケーションの摩擦が少ないことなどが本研究で明らかになった。そして夫と妻のコミュニケーション構造が異なった側面によって構成されていることも明らかになった。夫婦間に共通した側面はコミュニケーション摩擦であり、コミュニケーションの率直さとコミュニケーションの情緒的効果に関しては夫と妻がそれぞれの回答で独立した因子を構成していた。更に妻側にはコミュニケーションの量と質因子が存在し、夫には言語コミュニケーションへの認識因子が存在していた。最後に、コミュニケーションの情緒的効果因子に関しては、夫と妻の間に差が存在し、妻より夫のほうがコミュニケーションの情緒的効果が高いという結果が得られた。

国際結婚家庭の夫婦間コミュニケーションは言語能力に影響されるかどうかを検証するために、一元配置の分散分析を行った。夫のコミュニケーションの率直さは妻の言語能力に影響され、妻のコミュニケーションの量と質は夫の言語能力に影響されていた。また、夫の言語コミュニケーションへの認識は夫自身の言語能力に影響されていたことが明らかになった。そして、妻のコミュニケーションの情緒的効果は妻自身の言語能力と夫の言語能力によって異なり、妻自身と夫の言語能力の高いところでは、妻のコミュニケーションの情緒的効果が高かった。最後に、妻のコミュニケーションの率直さ、夫のコミュニケーションの情緒的効果とコミュニケーションの摩擦は夫婦の言語能力に影響されていなかったことが明らかになった。

国際結婚家庭における夫婦間コミュニケーションの諸因子のうち、言語能力に影響される側面と影響されない側面が存在し、影響される側面は言語能力によってどのように異なったかを本研究で分析したが、言語能力に影響されないコミュニケーションの側面、例えば、妻のコミュニケーションの率直さ、コミュニケーションの摩擦、又は夫のコミュニケーションの情緒的効果というような側面はどのような文化的、社会的要因に影響されるかを分析する必要がある。それと同時に、言語能力に影響されたコミュニケーション側面においても、言語能力以外にどのような文化的要因と社会的要因に影響されるかを分析する必要があろう。

注

(1) 一九七九年に設立し、最初は外国人夫を持つ日本人妻の会であったが、現在では国際結婚当事者はもちろん、一般の市民でも会員になれる。活動内容であるが国際結婚家族の住みやすい生活環境作りや国際理解を目指し、現在東京・名古屋・京都・大阪・福岡という五つの部会ごとに、月一回の集会や会報をメインに活動をしている。会員は日本全国及び海外まで分布している。

(2) 筆者の調査データによると、この四タイプの夫婦の使う言葉やコミュニケーションの様式に異なった特徴が見られ、更に外国人側配偶者の出身は欧米人であるか、それともアジア人であるかによって、周りの社会が国際結婚家庭への寛容度が異なるという先行研究（竹下、一九九七）もあるので、本研究では外国人側配偶者の国籍を欧米とアジア・アフリカ・南米に分けて分析することにした。また、欧米の中にはカナダ・オーストラリア・ニュージーランドも含む。

(3) 厚生省大臣官房統計調査部が編成した一九九七年度『人口動態統計』（財団法人厚生統計協会）のデータによると、日本人夫・欧米人妻の夫婦が国際結婚に占める割合が夫日本人・妻アジア・アフリカ・南米人の夫婦、夫日本人・妻欧米人夫婦、妻日本人・夫アジア・アフリカ・南米人夫婦、妻日本人・夫欧米人夫婦という四タイプの夫婦のうち、最も低い。更に筆者が行った調査は「国際結婚を考える会」、大阪府国際交流センター、日本語教室の会員（又はメンバー）とその配偶者を対象としたので、このような団体に所属していないと、調査対象者とされない制限があることをお断りしたい。

(4) 「明確・夫」は「明確」という質問項目に関する夫の回答である。「・夫」は夫の回答であることを表している。「明確・妻」は「明確」という質問項目に関する妻の回答である。「・妻」は妻の回答であることを表している。

(5) この調査のデータによると、「あなたは御主人（又は奥さん）と会話をするとき、どのようにして自分の考えや意志を伝えていますか」という質問に対して、「言葉で明確に表現する」と答えた人は夫と妻を合わせると一六一人、「言葉以外の態度やジェスチャーではっきりと表現する」三四人、「遠回しの言葉や態度で表現する」一七人、「表現しない」二人、「その他」四人という割合で、「言葉で明確に表現する」と答えた人は圧倒的に多い。なお、この結果は複数回答によるものである。

参考文献

ボスバーグ・ロバート、一九八九、「国際結婚カップルの文化不適応―日米結婚を中心に」南博・佐藤悦子編、『現代のエスプリ：カップルズ』二六二号、至文堂
日暮高則、一九八九、『「むら」と「おれ」の国際結婚学』、情報企画出版
川口マーン恵美、一九九七、『国際結婚ナイショ話』草思社
木田淳子、一九八七、「家庭生活における夫婦の共同―分離（三）―中年夫婦のコミュニケーションと夫妻間の理解」『大阪教育大学紀要二社会科学・生活科学』一九八七年一二月号
厚生省大臣官房統計調査部編、一九九七、『人口動態統計上巻（平成九年版）』、財団法人厚生統計協会
近藤裕、一九九八、『家庭内再婚―夫婦の絆とは何か』、丸善ライブラリー
Markoff,R.,1977. "Intercultural marriage:Problem areas", In W.S. Tseng, J.K. McDermott, & T. Maretzki (Eds.), *Adjustment in intercultural marriage*, Honolulu, Hi:Unisersity Press of Hawaii.
箕浦康子、一九八七、「異文化接触研究の諸相」星野、斉藤、菊池編『異文化とのかかわり』、川島書店
鍋倉健悦、一九九〇、『日本人の異文化コミュニケーション』、北樹出版
新田文輝著、藤本直訳、一九九二、『国際結婚とこどもたち』、明石書店
Rohrlich,Beulah F., 1988, "Dual-culture Marriage and Communication", International Journal of Intercultural Relations, 12, 35-44.
佐藤・H・バーバーラ、一九八九、「国際結婚における日本人親族との心理関係」、南博・佐藤悦子編『現代のエスプリ：カップルズ』二六二号、至文堂
シタラム、K.S.、御堂岡潔訳、一九八五、『異文化間コミュニケーション―欧米中心主義からの脱却』、東京創元社
竹下修子、一九九七、「国際結婚カップルの結婚満足度」『ソシオロジ』第

# The Role of Language Proficiency in the Communication Structure of Intercultural Married Couples

Lipin SHI

The aim of this paper is to investigate the communication structure between partners in intercultural marriages, and therefore to clarify the effect of language proficiency on the couples' communication. Although communication is one of the most important elements in intercultural marriages, the research on this subject is far from complete. Based on this consideration, a survey was conducted by the author in 1997 and some of the results are presented in this paper. According to the factor analyses, 7 factors have been found: (1) the husbands' communicative straightforwardness; (2) the wives' communicative straightforwardness; (3) the communication conflict; (4) the emotional effect of the husbands' expression; (5) the quantity and quality of wives' expression; (6) the husbands' consciousness of verbal communication; and (7) the emotional effect of wives' expression. As indicated by the ANOVA (analysis of variance), the language proficiency is the key issue in determining the husbands' communicative straightforwardness, the quantity and quality of wives' expression, the husbands' consciousness of verbal communication, and the emotional effect of wives' expression.

**Key words**

intercultural marriage, communication, language proficiency, conflict, understanding and empathy.